

アジア・太平洋研究センター主催研究会

日 時：2008年3月29日（土）

場 所：名古屋キャンパス L棟 9階910号室

発表者：小泉順子（京都大学准教授）

テーマ：歴史叙述とナショナリズム—近代タイにおける朝貢と条約のあいだから



小泉氏の報告は「歴史はどういうふうに枠づけられるのか」という疑問から始まった。従来のタイ史（および東南アジア史）は冷戦下で発達した地域研究の影響を強く受け、時代や地域が限定されて叙述されてきた。そのためにこぼれ落ちた問題があり、そこに光を当てることによって、それまでの近代タイ史（シャム史）を問い直して新たな歴史像が拓ける可能性がある。そのような視点から、中国とシャム（タイ）の朝貢と条約をめぐる交渉を、タイ側史料のみならず日本やイギリスの当時のメディア情報も踏まえて報告された。

シャムの中国への朝貢は元の時代（13世紀）から確認されるが、19世紀半ばに途絶える。これに対して清からは、朝貢督促が、中央官僚のみならず、シャム駐在の外交官や民間の商人からもなされる。シャム側では、中国側からの要求を拒否するでもすぐ受け入れるでもなく、それまでの慣行の遵守を要請したり、シャムの国家主権が清側に尊重されるかを見守るなどして、慎重に交渉を行う。一方、シャムは国内に多くの中国人移民を抱え、その動静も清との交渉のあり方に影響を与えていた。交渉は長引き（あるいは意図的に引き延ばされ）、時代の変化とともにその枠組みは「進貢」から「条約」へと移る。また、厳しい国際環境のなかで、中国社会も大きく変化しようとしていた。その後1910年には中国側からは、公式見解ではないとはいえ、「シャム

は独立国である」との認識も表明される。この間の交渉のチャンネルは多元であり、いくつかの問題が機軸となる。

このように、小泉氏は歴史を叙述する研究者の立つ位置を対象化しながら、広域史を構造的に考察する方法を模索した。今まで関心をもたれなかった史料に着目してこれと取り組むことは、単なる史実の発掘ではなく、従来の研究方法に対する批判が原点にある。

タイは東南アジアで唯一植民地支配を免れたが、それはイギリスとフランスという大国同士の利害から説明されることが多かった。しかし、小泉氏の報告からは、シャム側が弱肉強食の帝国主義の時代に、中国関係だけでなく日本の動向にも注目し、アジアのみならずヨーロッパでもアンテナをはって情報収集に努め、国際関係の動向を分析していたことが明らかにされた。武力の弱い「小国」の外交術、生存確保能力に改めて気づかされた。

(文責 小林寧子)